

熊本県におけるサルの手や頭蓋骨に
についての民俗学的調査
藤井尚教（尚絅大・文・心理）

本年は熊本県下全域で各教育委員会と県神社庁の協力のもとにサルの手や頭蓋骨の調査を行った。

県下94教育委員会と185神社にアンケート調査を行い、それぞれ45会、110社の返答を得た。その中で情報が得られた1教育委員会と5神社について現地調査を行った。さらに他の情報により2ヶ所の追加調査を行った。

サルの手として残されていたものはただ一つでそれは不幸が続いた後に魔除として農家の縁側の内壁に打ち付けられたものであった。

他はすべて河童の手として残されていて、現物4つと現物が失われた2つの計6つを見つけた。

それらの中で、サルの手と確認できるものは2つであった。特にその中の1つは骨と肉が取り去られていて皮だけで残され、たぶん犬神よけの呪物として使われていたらしい。

残り4つのうち1つはカワウソの手と思われた。他の3つのうち、現物のない2つは同定できないが、現物のあるものは手肢が長く手の幅は短くて田主丸の河童の手に似ている。

河童の手はサルの手と比べて呪術に使われる事は少なく宝物として大切に保管され、いわゆる河童退治の話が残されていた。一方サルの手は魔除として今でも使われていた。

どうしてサルの手が河童の手として残されているのであろうか。サルと河童の関係では常にサルが優位であると言われているのに！。

なお、サルの頭蓋骨の顕著な情報はなかった。

ニホンザル野生群におけるオス間関係
の通時的変化と群間比較
高橋弘之（京都大・理・人類進化論）

ニホンザルの野生群におけるオス間関係は、群れによって異なることが報告されている。本研究の目的は、オス間関係について、一群の長期継続観察によるオスの順位、滞在期間および年齢や社会性比の通時的変化との関連、同一地域に生息する複数の群れ間での比較から、オス間関係に変異をもたらす要因を明らかにすることである。

調査対象は、宮城県金華山島に生息するニホンザル野生群、A群およびB1群である。1995年出産期と交尾期に群れオスを個体追跡し、グルーミング、近接等の社会的相互交渉の資料を収集した。分析には、1992年交尾期から95年冬期までに得られた資料を含めた。資料は現在整理中であるが、これまでに以下の点が明らかになった。

1) 3年間にわたる調査期間中、A群のオスの頭数は2頭から7頭、社会性比（オトナオス／オトナメス）は0.12から0.35の間で変動した。オスの順位、滞在期間、年齢は、それぞれの組み合わせで有意に相関したオス間の平均近接指数は、社会性比と有意な相関がみられた（ $p<0.01$ ）が、順位、滞在期間および年齢とは有意な相関はみられなかった。2) B1群の社会性比は0.5から0.56とA群より高かった。B1群ではオス間のグルーミング交渉は、オス・メス間のそれを上回っていたが、A群では常に下回っていた。以上から、ニホンザルのオスは群れの構造的性質（社会性比）に応じてオス間の親和的交渉を行なうことが明らかとなった。